

室町期歌会資料集成稿―積文と略解題―(四)

石澤一志・酒井茂幸
武井和人・日高愛子

【緒言】

本連載は、多くが未刊・未整理のまま残されてゐる室町期歌会資料（及びそれに関連するもの）を、広く学界に紹介することを意図してゐる。

今回の小論では、以下の二度の歌会の積文を掲げ、併せて略解題を付した。

〔1〕永享四年二月十一日室町殿月次和歌

〔2〕永享五年三月二七日足利義教邸初度御会和歌

当該歌会資料の積文、略解題の礎稿作成者を（ ）に入れて示した。ただし内容に関しては、著者相互に検討してゐる。

積文作成にあたり、以下の方針に従った。

- (1) 漢字は原則として通行の字体に統一した。
- (2) 丁移りを、「一・一」の如く示した。
- (3) 上句と下句の間に、一字分空白を設けた。
- (4) 和歌は一行書に統一した。

底本の書誌、各歌会の成立事情等は、略解題を参照されたい。

小論は、JSPS 科研費二六三七〇二〇〇の助成を受けたものである。

積文底本として所蔵典籍の利用を許可された、公益財団法人静嘉堂・静

嘉堂文庫、興福寺教学部に、あつくお礼申し上げます。

（武井和人）

1 永享四年二月十一日室町殿月次和歌

〔興福寺国宝館蔵『習見聴諺集』第六本（興七―二六二）〕

権中将藤原実雅

古懐紙写也

室町殿月次和歌御会永享四年

詠三首和詞

暁帰雁

義一

二行七字
あまの戸のあけかたちかきかねのをとに 枕のゆめもかへるかりかね

遠尋花

たつねゆく花に日かすはわすられて かへさやとをき家ちならまし

寄船雑

から国の舟をまつらのうら風も おひてを殿になりて浪そよりくる

春日同詠三首和歌

権大納言藤原公保

たちまよふ霞をわけてゆくかりも をのかしるへやありあけの空
たつねいる花にひかれてあつさゆみ 春の山路をいくえこえけん
なみ風もともにおさまるよもの海に たえずみつきの舟やよる覧

端作同

権中納言藤原雅世

ほのかなる在明の月の弓はりに かへるはそれかあまつかりかね
けふの日もくるゝや山ちわけ過ぬ また見ぬ花のかけをとふとて
時しあれば君かねかひも三の舟 よるへをちきれ庭のいけ水

右京大夫持之

人ならはうらみんものを春の夜の あかつきふかしかへるかりかね
雲もいりかすみをわけてかへりみる 跡より花の又やまかふらむ
おさまれる御代になるみのうら人は さはりなきさに舟やよすらむ

春の夜のころもかりかねたちわかれ かへるやさむきあり明の空

けふもなを山より山にわけきつゝ 花にはとをきみねのしら雲

よもの海なみおさまれる御代なれば まほにそかよおきつふな人

前阿波守義忠

ふるさともいかゝちきりて春のかり あくるこの夜をまたてゆくらむ

おもひたつこゝろの末やもろこしの よし野の花をやとりならまし

君か代もおさまる浪をみちそとや 四方のうらわに舟かよふらむ

左近衛権中将藤原為之

いくたひかねさめの空にきゝぬらん つれてうつらぬ春のかりかね

かすみこし雲よりおくの峯こえて にほふやちかき花の木のもと

たえせしな風おさまりて四方のうみ ゆきかふ舟のはこふみつきは

左衛門佐持有

したふとも空にしらてやわかるらむ ねさめ夜ふかくかへるかりかね

しら雲とみゆるを花のしるへにて なを山ふかくわけやゆかまし

うら風になにはのあしまこき出し なみにさはらぬあまのつり舟

左近衛権少将藤原雅親

春さむき夜半のねさめにしたふなり 我かたしきのころもかりかね

はる／＼とたかねの雪をしるへにて さけるさかさる花やたつねむ

わきていまのとけき御代にこきいてゝ 浪もおさまる和哥のうら舟

左京大夫持信

あかつきの雲とかすみの浪のそこに かすさへ見へすかへるかりかね
わけきてもなをこそまかへみよし野や 山よりおくのはなのしら雲
すみよしやおまへのおきによる舟も ともにそうかふあはちしま山

前陸奥守満経

かすむ夜の空にまよけてあり明の 月にやいそく春のかりかね
なをふかくたつねいりなは山さくら こえにし雲や花にゝほはむ
あし原のゆかまてあふく御代なれハ もろこし舟もいまそ待みん

下野守持春

春ことのちきりそうすき山かつら かけはなれゆくかりのいつら
まかへつる雲をもわけてけふいくか 花ゆへまよふ春のやまふみ
浪かせもおさまる御代にひかれつゝ かよひなれたり和哥のうら舟

伊予守義稚

ありあけの月さへうすきむら雨に やまのはくらくかへるかりかね
雪ふかき山よりおくに尋きて わけつゝまよふ花のしたみち
よさの海やあまのつり舟かす見えて 松にしつまるおきつしほかせ

詠三首和調

准三宮満濟

ありあけの月をたのむの雁かりかねや かすみにゆくもたとらさるらん
わけきつる山もかすみて暮てけり いくつかの花にやとりとらまし
よる代本ノマ、つ殿のこゑをほにあけて浪風も おさまる時にこたふふな人

前大僧正義運

くまもなき秋とたのめてかすむ夜の ありあけ月にかへるかりかね
ゆくすゑの山路はくれぬこよひなを 花によそふるたひねをやせん
熊野川くたすを舟もさすさほの 見なれし瀬ゝを神もわするな

沙弥常照

夢路にハそれかとはかりきこえきて ねさめさたかにかへるかりかね
山をこえさともすきてたつねゆく 花にいく夜のたひねしつらむ
もろこしや舟のをひかせ時をえて 千代もみつきを君にそなへん

権少僧都堯孝

いそくなよゆふつけ鳥ハもよほせと また夜そふかき春のかりかね
今よりやおもひたゝましよしの山 さくをも花のかけにまつへま
いのりこし和哥のうら風なひく世に ふなよそひせよ玉津しまひめ

永享四年二月十一日月次御会

以雅永卿手跡本写之本草子

享徳元年十一月一日常光院より被進之

以飯尾彦六さ衛門手跡本写之従可竹新信貴中坊相伝之本云々

天文九年豫十一月廿三日

同廿二妃三月十八日以実政願信丸手跡之本写之畢彼飯尾彦

六さ衛手跡之本ハ

英深学返丸法ニ可在之

(石澤一志・酒井茂幸)

〔2〕永享五年三月二七日足利義教邸初度御会和歌

〔静嘉堂文库蔵『瑠璃壺百首』(八二・三四・一五二二二)〕

普広院殿初度御会和歌

春日陪 左相府書閣同詠 花万春友応

教和歌一首并序

少納言菅原為清

夫可樂者治世也方遭八紘艾安之時可賞

者韶景也既当三月芳菲之候 我左相

府尊閣厚源流之正流備 王室之高

藩武略兼人草木自靡於威風仁声蓋

代夏夷皆浴於德沢今属政機之余暇

則催雅席之歆遊博陸台階之賓各旋華

軒而臨清宴棘路蓬台之客教述錦心而

応恩招威集之儀叵得而称者乎觀夫花

柳共榮而結万春友生之約台詔新成而

顕庶民子来之功物叶歆情地鐘神秀在

座之件相顧曰永徳之昔 先公弄夜月

千秋之輝永享之今 尊閣伴春花万歳

之色緬憶嘉躅自似合符為清雖令材

用而繼踵於儒林之塵忝承鈞命而留

名於敷島之什不耐抔悦三志謹綴諷詠

之文其詞曰

けふよりは花に契りて万代の 春のためしを君にはしめむ」一

春日詠花万春友 和歌

従一位満輔

万代の契りも久しあひにあふ みきりの花の春のかさしは

関白持基

契りをく君かみきりの花の色に かねてもしるし万代の春

従一位兼良

桜花あかぬにほひに万代を いはふ心の色やみゆらん

左大臣義一

ことしより更に契りて我宿の 花にまつへき万代の春

春日侍 左相府書閣同詠

花万春友応 教和歌

従一位公冬

万代と君に契れる此春や はなもひとしほ色をそふらん

陸奥出羽按察使藤原公保

百とせをもゝかへりきる君か代の さかゆく春も花にみゆらし

春日侍 左相府尊閣同詠

花万春友応 教和歌

権大納言藤原実熙

さかへ行やとから花もいろそひぬ けふより契る万代の春

春日侍 左相府書閣同詠」二

花万春友応 教和歌

権大納言藤原実量

ことしなをさきそふ花に万代を ちきれるはるの色やそふらん

権中納言藤原雅世

万代の春へんやとに契れるは さきそふはなの所からかも
春日陪 左相府書閣同詠

花万春友応 教和歌

権中納言藤原宗継

万代の春をかさねて咲はなの 盛を君に契り置らし

権中納言藤原兼郷

万代の春の友とや君もみん 風おさまれる花に契りて

参議左近衛権中将藤原定親

咲にけりけふより君に契りをく 八百万代の春のはつ花

春日侍 左相府書閣同詠

花万春友応 教和歌

参議右近衛権中将藤原実雅

咲匂ふみきりもたかし花さかり 契りかさねよ万代のはる

左近衛権中将藤原雅永

よろつ代の春に契りを結ひ置て ひもとく花の色そ久しき

春日侍 左相府書閣同詠「三

花万春友応 教和歌

左近衛権中将藤原為之

いく春そなれてみきりに万代を かそへとるへきはなの下かけ

春日侍 左相府書閣同詠

花万春友応 教和歌

権少将藤原雅親

君ならてたれかみきりの花盛 いく万代の春をかけても

春日陪 左相府書閣同詠

花万春友応 教和歌

侍従藤原為季

さかへ行ためしは君か万代の 春そとけふや花に契らん

(五行分空白)

永享五年三月廿七日 和歌 御会始

題者 飛鳥井中納言

読師 按察大納言

講師 為清朝臣「四

講頌

按察大納言 洞院大納言

飛鳥井中納言 中御門中納言

日野中納言 中山宰相中将

新宰相中将 雅永朝臣

為之朝臣 雅親

(二行分空白)

右一卷普広院殿義教公初度御会和

歌也以榮雅之真跡書写之尤為珍書歟

天和元年臘月日

(九行空白分)「五

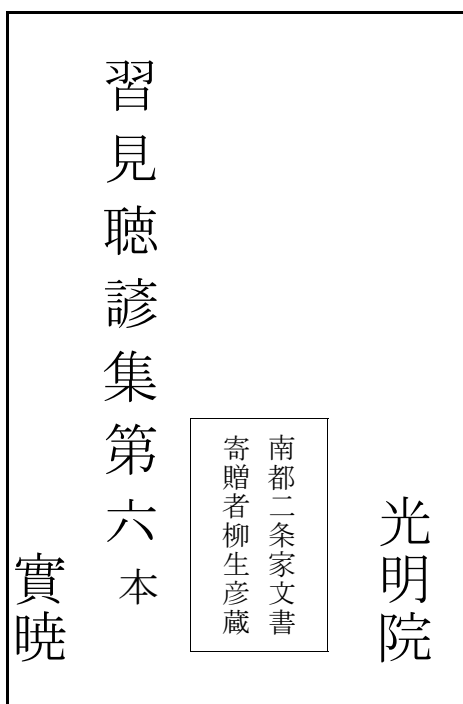
(日高愛子)

【略解題】

1 永享四年二月十一日室町殿月次和歌

小論で底本としたのは、興福寺国宝館蔵実暁自筆『習見聴諺集』第六本〔興七―二六二〕である。該本の書誌について、拙著『中世古典籍字序説』（和泉書院、二〇〇九・八）で整理したが、補筆の上再掲する。

二条家文書の内。全一〇冊。大和綴。二六・五×一六・五cm。本文料紙はやや薄手の楮紙。後補表紙が各冊にかけられる。丁子引横縞刷毛目文様（近代のものか）。元表紙は以下の通り。



光明院

南都二条家文書
寄贈者柳生彦蔵

習見聴諺集第六本

實暁

なほ、釈文作成にあたり、興福寺本の転写本である前田育徳会尊経閣文庫蔵『実暁記』（二一・六・一三）を参考した。

本歌会に關しては、井上宗雄「室町前期歌書伝本書目稿」（『中世歌壇史の研究 室町前期〔改訂新版〕』（風間書房、一九八四・六）の記述が唯一の先行文献であると思はれる。

二月11 室町殿月次和歌 御五時代和歌（竜門文庫）・実暁記6（尊経閣）・架蔵（残欠）「暁帰雁」以下 義教（あまの戸のあけか

たちかきかねのをとに枕のゆめもかへるかりかね）・公保・雅世
・持之・実雅・義忠・為之・持有・雅親・持信・満濟・義運・常
熙・堯孝（巻頭写真参照）

井上が伝本として指摘する阪本龍門文庫蔵『御五時代和歌』（七六八）（田村右京大夫宗永遺書之内、元禄二年写）は未見。また、井上蔵本は現在所在不明。井上『書架解体 王朝和歌から中世和歌へ』（青簡社、二〇一〇・一〇）未載。ただ幸ひ、『中世歌壇史の研究 室町前期』口絵に写真版が掲載されてゐるので、試みの釈文を以下に掲げておく。

前阿波守義忠

ふるさと（タマ）にかちきりて春のかり
あくるこの夜をまたてゆくらむ
おもひたつころの末やもろこしの
よしのゝ花をやとりならまし
君か代におさまる浪をみちそとや
四方のうらわに舟かよふらむ

左近衛権中将藤原為之

いくたひかねさめの空にきぬらん
つれて□つらぬ春のかりかね
かすみこし雲よりおくの峯こえて
にほふやちかき花の木□もと
たえせしな風おさまりて四方のうみ
ゆきかふ舟のはこふみつきは
左衛門佐持有
したふとも空にしらてやわかるらむ

ねさめ夜ふかくかへるかりかね
しら雲とみゆるを花のしるへに□
ねさめ夜ふかくわけやゆかまし

————— (料紙継目)

うら風になにはのあしまこきいたし
なみにさはらぬあまのつり舟

左近衛権少将藤原雅親

○

本歌会に関しては、『看聞日記』『満濟准后日記』に記事が見える。また、『史料稿本』には、東京大学史料編纂所蔵『実暁記』(二〇〇九―二六)(尊経閣文庫本ノ転写本)によると思はれる記事が掲載されてゐる。

◆十一日、雨降。……今日室町殿御歌御会、三宝院頭役沙汰云々、三条へ使帰参、中将御所ニ祇候之間、則披露、料足埴和右京亮請取云々、出請取了、御歌人数公武濟々参云々、

〔『看聞日記』(『図書寮叢刊本』による、以下同)〕

○

◆十一日。雨。今日歌月次在之。頭役予勤仕之。五百疋也。折等不及進之。題三首。懷紙。暁帰雁。遠尋花。寄舟雑。御人数如去月。每事同前。御歌以前九州事三人意見分内々先申了。

〔『満濟准后日記』(『続群書類従完成会本』による、以下同)〕

〔参考〕同前・永享四年正月十三日条

……松奏以後御歌会在之。当年初并新造御会始也。題着雅世卿。松樹契久。読師雅世卿。講師雅永朝臣。御文台役赤松播磨守満政。浅黄直衣。裏打。御歌人数。三条大納言公保卿。飛鳥井中納言雅世卿。

三条中将実雅朝臣。雅永朝臣。為之朝臣。雅親。以上狩衣。綾。山名右衛門督入道常熙。細川右京大夫持之。畠山阿波守。赤松左京大夫入道生性具。一色左京大夫持信。斯波左衛門佐。細河右馬助持賢。同下野守持春。同陸奥守。赤松播磨守満政。同伊予守義雅。僧中予。実相院兩人。堯孝僧都也。予重衣生袴。実相院同前。武家輩悉裏打着。每事嚴重。懷紙重様僧俗各別。先僧中懷紙講之。次俗中悉畢。將軍御懷紙御懷中。於当座読師賜之。更置文台。此御一首計自余撤了。講師重題以下読上之。先々八題不及読之キ。今度初御儀出來了。

准公宴儀歟如何。披講悉一反。御詠計五反歟。先々予并実相院詠三反誦之キ。去年御会中絶。其後御再興以來悉一反也。御座及数刻故歟。披講了御一献。五献在之。將軍御沙汰云々。御前着座人数。予。実相院上壇九間。南將軍御座。令向北給。西予。向東着。次東四間一段下。三条大納言。山名。細河右京大夫。畠山阿波守。赤松入道。以上北。飛鳥井中納言。三条中将。以上南。御陪膳一向武家輩。五献了各退出。御会始間千疋折紙進之了。山名二千疋。太刀進之云々。右京大夫。赤松等定此儀歟。御歌御会以後觀世申樂在之。女中以下御見物云々。……

○

〔参考〕

(正月)十三日、癸酉、晴、室町殿御會始也、題松樹契久、御會已前□□松ハヤシ有之、

〔『師郷記』(『史料纂集本』による。以下同。底本は国立国会図書館蔵師郷自筆本)〕

(武井和人)

〔2〕永享五年三月二十七日足利義教邸初度御会和歌

小論で底本とした静嘉堂文庫蔵『瑠璃壺百首』（八二・三四・一五一
二二）に関しては、以下の拙著にて触れたことがある。

①『一条兼良全歌集 本文と各句索引〔笠間索引叢刊八〇〕』

（笠間書院、一九八三・八）一三七頁

②『中世和歌の文献学的研究〔笠間叢書二二一〕』

（笠間書院、一九八九・七）六一三頁

②に書誌を記しておいたが、若干追補した上で再述してみたい。

「装訂」袋綴装。「法量」縦二八・八×横二〇・九五cm。「表紙」後
補、水色無地。「外題」瑠璃壺百首 完（後補・左・簽・書・双郭）。
「内題」瑠璃壺百首（端作題）「本文」一面八×十行、和歌一首一
行または二行書。「紙数」「瑠璃壺百首」六丁、「秋日陪 巖島明神
三十三首和歌」六丁、「普光院殿初度御会和歌（〓永享五年三月二
七日足利義教邸初度御会和歌）」五丁、「永正元年八月廿五日月次和
歌御会」五丁、「享祿四年十月十五日月次和歌御会」五丁、「永正十
一年撰州畑天満宮法楽」二丁、「詠三十首和歌永正九年月日」七丁、
「（永正八年十二月廿五日御会和歌）」五丁、「堯然百首」二〇丁、
計六一丁。「本文料紙」楮紙「識語」本文末尾にあり。积文参照。「天
和元年（一六八一）臘月日」は、親本のものであらう。「蔵書印」
墨付第一丁表右下に「静嘉堂蔵書」（長方朱印、双郭、陽刻）一顆
あり。「書写者、書写年代」元禄前後歟。

本歌会に関して、初めて言及したのは、井上宗雄である。

（永享五年三月）廿七日は永徳元年の義満歌会に倣い、九条満輔・

二条持基・一条兼良以下の頭官を招き、（義教ハ）豪華な歌会を行
つた（管見記・薩戒記）。「書目稿参照」（『中世歌壇史の研究 室町
前期〔改訂新版〕』（風間書房、一九八四・六）一〇五頁）

三月27 足利義教邸初度御会和歌 静嘉堂本（『瑠璃壺百首』に合
綴。題名は「普広院殿初度御会和歌」。なおその他を合綴）・弘文
莊書目20 「花万春友」 為清の漢文序・和歌、以下作者は、満輔

・持基・兼良・義教・公冬・公保（読師）・実熙・実量・雅世（題
者）・宗継・兼郷・定親・実雅・雅永・為之・雅親・為季 講師為

清（*は講頌）（同・五八三頁）。

井上が今一つの伝本として指摘する「弘文莊書目20」であるが、これ
は、『弘文莊待賈古書目』第二〇卷（一九五一・六）九九頁に所掲され
る、以下の典籍を指す。

四四六 永享左大臣義教觀櫻和歌傳飛鳥井雅親筆

一卷 二、八〇〇圓

紙高三一糎、歌二行書。三月廿七日足利義教に陪して
櫻を見し時の詠。詠者義教・一條兼良・二條持基等。

巻首に東坊城長清の眞名序あり。原装、時代箱入。

当該伝本の所在は不明。しかし、底本とした静嘉堂本奥書に「以栄雅
（〓飛鳥井雅親）之真跡書写之」とあり、当該伝本の転写本であらうこ
とが推測される。

本歌会に関しては、早く『統史愚抄』永享五年三月廿七日条に「於
左大臣義教・室町第一有和哥會晴藏・大臣松萬春友・飛鳥井中納言・公卿
前関白満輔・関白持基。已下十二人。殿上人少納言為清朝臣。講師及已

下四人參會。讀師按察大納言。公保。披講後有二詠云。奉行家司左中將雅永朝臣。兼日事飛鳥井中納言雅世令○公卿補任、薩戒記、執筆抄、管見記、外記記、永助親王記(新訂增補国史大系本による)といった簡潔な記事が見える。以下、関連する史料を摘記しておく。

◆廿七日、晴、(略) 今日室町殿御歌晴御会也、一条兼 関白・前関白・前撰一条兼 政以下済々参云々

〔看聞日記〕

○ ◆廿七日。晴。於室町殿御晴御会在之。御人数十八人云々。九条前関白。二条撰政。一条前撰政等今度参云々。

〔満濟准后日記〕

○ ◆廿七日晴自今日縣召除目(略)〔鼈頭ニ「廿八日」トアリ墨滅ス〕

今日室町殿、有和哥御會題松萬春友有序大内記為清朝臣 / 作進之々々、参仕人、九条 前関白・関白・前攝政・前右大臣各烏帽子直衣々々・按察大納言讀師

とと・洞院大納言・三條大納言・飛鳥井中納言出題・中御門中納言・日野中納言・中山宰相中將・三條宰相中將・爲清朝臣講師とと・雅永朝臣・雅親「墨滅」・爲季等とと、和哥并序必可寫留者也

〔管見記(公名公記)〕〔宮内庁書陵部図書寮文庫蔵西園寺公名自筆本〔F一―一―〕による。私に句読点を付す。史料稿本を参看す〕

○ ◆三日、丁巳、天晴……今日飛鳥井中納言送消息云、堅固内と狀中、

來廿七日於 室町殿可有和哥御會、可令參給之由、被仰下候、題被進之候也、恐と謹言、

三月二日

雅世

中山殿(定規)

別紙云、懷昏一枚書之、卷籠狀中、

花萬春友、

是承相已後初度晴御會始也、故鹿苑院入道殿、永徳二年七月任槐、(元) (二十三日、任内大臣)

八月十九日有此事、彼度故入道中納言雅縁卿于時四位殿上人、兼日事(義滿和歌會始)

奉行之、於當日者家司左兵衛權佐資藤奉行之、今度依彼例納言内と(飛鳥井)

奉仰相觸之、於當日儀者家司雅永朝臣可致沙汰之由被仰云と、(飛鳥井)

○ ◆廿一日、乙亥、天晴、來廿七日左大臣殿御會和哥案出之分、且注遣

左中將雅永朝臣許、是爲知同類之有無也、閑可一見之由有返答、

○ ◆廿四日、戊寅……未刻向飛鳥井中納言許、示合和哥御會并廿九日武

家御鞞事等、良久清談、及晚按察大納言・中御門中納言・新宰相中將等來會……入夜歸鞞、

○ ◆廿七日、辛巳、天晴、今日左大臣殿和哥御會也、永徳元年八月十九

日、故鹿苑院殿初度御會也、且被模倣例、兼日事、飛鳥井中納言雅世、内と承仰賦題、當日儀、家司左中將雅永朝臣奉行之、永徳兼日内

と故入道中納言雅縁卿于時左中將、奉仰相催之、當日儀、家司左兵衛權佐資藤奉行

之也、(補書) 殿上人皆帶劔由、有所見之由談、予答可然坎之由了、後案之、公

卿皆直衣日也、然者雲客不可帶劔事坎、猶可勘、(實惠) 新大納言父公進置懷昏、不致家「礼」(㊦)事、(三條公冬)

按察・洞院（實熙）兩人外、於座不見懷昏事、於長押下悉伺御氣色事、三攝家皆動座事、

『薩戒記』〔大日本古記録本による。以下同。底本は、陽明文庫蔵七十二冊本第三十一冊、校合本、東山御文庫收藏本第三十一冊Ⅱ⑦〕

○

◆廿七日、辛巳、晴、……今日於室町殿御會晴御／會也、題花契万春、

題者／飛鳥井中納言也、公卿前（兼輔）關白（二條持志）・前攝政（兼良）一条殿・三条前

右府公冬公・按察大納言公保（三條西）・洞院大納言實熙・新大納言實量（三條）・飛鳥井

中納言雅世・中御門中納言宗繼（宗本）・日野中納言兼郷・中山宰相中將定親・

三条宰相中將實雅・殿上人雅永朝臣左中將・爲清朝臣大内記・爲之朝

臣左中將・雅親左少將（飛鳥井）・爲季侍從等參之、有序、爲清朝臣書之、讀師

按察大納言、講師爲清朝臣、下讀師雅親、主人御烏帽子直衣也、大

臣皆同前、公卿事了大臣許被申御會所有御一獻云、

『師郷記』

○

◆廿七日、今夕、於左府亭（義教）、有和哥會、被摸永徳鹿苑院殿、於寢殿有

其儀。關白（二條持基）・前關白（一條兼良）・前右府（三條公冬）已下十余人、主人并關白等兩三、烏帽

子・直衣。或束帶・衣冠相交云、。出題飛鳥井中納言（雅世）。花万春友。披

講事了、有朗詠。洞院大納言（實熙）一人詠之。永徳儀云、。

『永助法親王記』〔宮内庁書陵部図書寮文庫蔵柳原本「後常瑜伽院

永助法親王記（永享四・五年）〕〔柳・三六八〕による。私に句読点を

を付す）

（武井和人）